

米百俵

2020. 7. 2

二本松市安達町出身で、セブン銀行特別顧問であり、東洋大学理事長でもある安齋隆さんが、「どのような若者が求められるか」という質問に対して、次のように答えている。

箱根駅伝で山の神と言われた柏原竜二さんは現役時代、起床時間から食事、練習内容まで全て記録して自己管理を徹底した。どうやったら柏原さんや池江さん（池江璃花子さん・競泳選手）のような強い人間を育てられるか。大企業に就職すれば良いという時代は終わった。企業に入るのが目的ではなく、入って何をするか。考える社員がいないと企業は生き残れない。社会全体が、目の前のことに金を使うのではなく、将来世代のために使う『米百俵』の精神を持ち、教育内容を充実させるのが重要だ。

「米百俵の精神」とは何か。河井継之助が率いた北越戊辰戦争に敗れ、焦土と化した長岡のまちに、支藩である三根山藩から見舞いとして米百俵が送られた。長岡藩大参事の小林虎三郎は、この米を藩士らに分配せず、国漢学校設立資金の一部に充てた。

この故事は昭和18年（1943年）に刊行された、作家山本有三の戯曲「米百俵」によって広く知られるようになり、小林虎三郎の精神は多くの人々に深い感動を与えた。

「米を分ける」と詰め寄る藩士らを前に、長岡藩の気風「常在戦場」の書幅を背にして、小林虎三郎が教育へ寄せる思いを熱く語る。戯曲「米百俵」の一番の見せ場である。戊辰戦争に敗れ、長岡の人たちの暮らしは、その日の食事にも事欠くありさまだった。そんな中、小林虎三郎は「どんな苦境にあっても教育をおろそかにできない」と主張し、明治2年（1869年）5月1日から、焼け残った昌福寺の本堂を仮校舎として、国漢学校を開校した。

翌年5月、長岡の窮状を見かねて、支藩の三根山藩から見舞いとして、米百俵が送られてきた。藩士らは、当然分配されるものと待った。しかし、小林虎三郎は、分配しても一人当たりいくらにもならないこの百俵を元にして学校を建てるのが、戦後の長岡を立て直す一番確かな道だと説いた。そして、「百俵の米も、食べばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」と諭し、反対する藩士らを説得し、米を売り、その代金を国漢学校の書籍や用具の購入に充てたのである。

6月15日には新校舎が完成した。それまでの藩校は、漢学を主に教えていたが、国漢学校ではそれだけでなく、日本の歴史や国学、さらに洋学、地理や物理、医学までも質問形式の授業で学ぶことができた。また、身分にとらわれず誰でもが入学できた。

このエピソードは「米百俵の精神」という言葉になり、内閣総理大臣だった小泉純一郎が、小泉内閣発足直後の国会の所信表明演説で引用し、有名になった。

「どんな苦境にあっても教育はおろそかにできない」という小林虎三郎の考えは、今も日本に脈々と受け継がれている。学校は、国や県、市町村から、様々な財政的支援が受けられる状況にある。苦しい財政事情の中、教育にお金を使うのである。我々学校に勤務する者、教育に携わる者は、「米百俵の精神」を忘れず、最大の効果を上げる努力をしなければならない。